

教育研究会全体会

日時:8月3日(土)10:00~11:15

場所:高等部ホール

内容

- 1 本校の教育課程について
- 2 研究概要
- 3 研究の具体的取組
- 4 総括

金沢大学附属特別支援学校 研究主任 北 翔平

金沢大学附属特別支援学校の教育について

教育目標

本校は、心身の発達に遅れや障害のある児童生徒に対して、その実態に即した指導を行うことにより、一人一人の全面的な発達を促し、その子らしく精一杯生きる力を育てることをめざす

学校概要

本校は、石川県金沢市にある、知的障害のある児童生徒のための特別支援学校で、金沢大学人間社会学域学校教育学類の附属学校です。小学部、中学部、高等部を設置しております。

○ 児童生徒数

学部	組・学年	男(人)	女(人)	計(人)	学部合計(人)	
小学部	1組	1年	1	2	3	6
		2年	3	0	3	
	2組	3年	2	1	3	6
		4年	1	2	3	
	3組	5年	1	2	3	6
		6年	2	1	3	
中学部	1年	3	2	5	16	
	2年	4	2	6		
	3年	3	2	5		
高等部	1年	4	4	8	24	
	2年	3	5	8		
	3年	5	3	8		
合計		32	26	58	58	



○ 研究年譜

- 平成元年～平成5年 発達と障害に応じた指導
- 平成6年～平成10年 豊かな心と生活を目指して
- 平成11年～平成13年 豊かな心と生活を目指す教育課程づくり
- 平成14年～平成15年 一人一人の「わかる」を大切にした学習活動を目指して
- 平成16年～平成19年 一人一人の豊かな生活を目指す実践～子どもから出発して
- 平成20年～平成22年 一人一人のニーズを読み取り育てる取り組み
- 平成23年～平成24年 一人一人の自己実現につながる学校生活の再考
- 平成25年 キャリア教育の視点からの教育課程を小中高3学部の学習内容の一貫性、系統性、関連性の側面から再考する(文部科学省事業)
- 平成26年～平成28年 キャリア発達支援の視点による小中高12年間を見通した学習活動の充実改善(文部科学省事業)
- 平成29年 児童生徒の社会的・職業的自立を指向し、一人一人の育ちと学びのプロセスを大切にした授業づくり
- 平成30年～令和2年 地域・人とのかかわりを通して、学ぶ楽しさ、伝え合う喜びを育む授業づくり(文部科学省事業)
- 令和3年～令和6年 自立と社会参加のための国語力を育む教育課程の探究(文部科学省研究開発学校指定)



研究概要

研究のテーマ

令和3～6年度 文部科学省研究開発学校指定

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力の育成

自立と社会参加のための国語力を育む 教育課程の探究

～小学校等との「学びの連続性」の探究を通して～
[4/4年次]

「自立と社会参加」について考える

(1) 自立の概念

○ 「自立」とは、「他の援助を受けずに自分の力で身を立てること」の意味であるが、福祉分野では、人権意識の高まりやノーマライゼーションの思想の普及を背景として、「自己決定に基づいて主体的な生活を営むこと」、「障害を持っていてもその能力を活用して社会活動に参加すること」の意味としても用いられている。

【出典】社会保障審議会福祉部会(2004)社会福祉事業及び社会福祉法人について(参考資料)。

障害者の自立と社会参加を目指して

障害のある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと明るく豊かに暮らしていける社会を目指す「ノーマライゼーション」の理念に基づき、障害者の自立と社会参加の促進を図っています。

◇ノーマライゼーションの推進のために

ノーマライゼーション推進のために、サービス提供体制の充実に取り組んでいます。また、障害者の主体性が尊重されるよう、利用者自らが福祉サービスを選択できる新しいサービス利用の仕組みを導入しています。

【出典】厚生労働省.障害者の自立と社会参加を目指して。
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/idea01/index.html>
I(参照2023-6-22)

【自立と社会参加】

①自己決定に基づいて主体的な生活を営むこと

②障害を持っていてもその能力を活用して活動に参加すること

→「自立と社会参加」は児童生徒自身が社会の中で自己選択・自己決定することの重要性から研究主題として設定した

👉「自立と社会参加」を教育課程の要とし、国語力の育成を行う

国語科の学習で育成すること

言葉で伝え合うよさ

(言葉の「伝達機能」)

・自分の思いや考えをもち、伝え、共感を得ることができる

・言葉によって自分の要求を伝え実現することができる

言葉がもつよさ

(言葉の「認識・思考機能」)

・言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりする

・言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにする

【出典】
・文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)(平成30年3月).80-259
・文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編.13
・井上雅彦・青砥弘幸(2018)初等国語科教育.ミネルヴァ書房.11.

※言葉の働き:①認識・思考機能、②「伝達機能」、③「文化的機能」

研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 ・配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

本校で育成したい「自立と社会参加のための国語力」

教育
目標

社会で他者と共同・協働しながら、自分らしく精一杯生きる姿

自分の思いや考えを伝える力

他者の思いや考えを受けとめ、理解する力

高等部

・豊かな語彙力と表現方法を身に付け、自分の気持ちや考え、想像したことを**適切な言葉で表す力**

相手意識をもってやり取りする

高等部

・話し手が伝えたいことの内容を適切に捉え、**互いに納得・合意**を図りながら物事を進める力

中学部

・自分の気持ちや考えを言葉や文字などそれぞれの表現方法で相手に**伝える力**

思いや考えを相手に伝える

中学部

・話し手が伝えたいことの内容を**適切に捉え**、捉えた内容を自分なりの言葉で話す力や行動に移す力

小学部

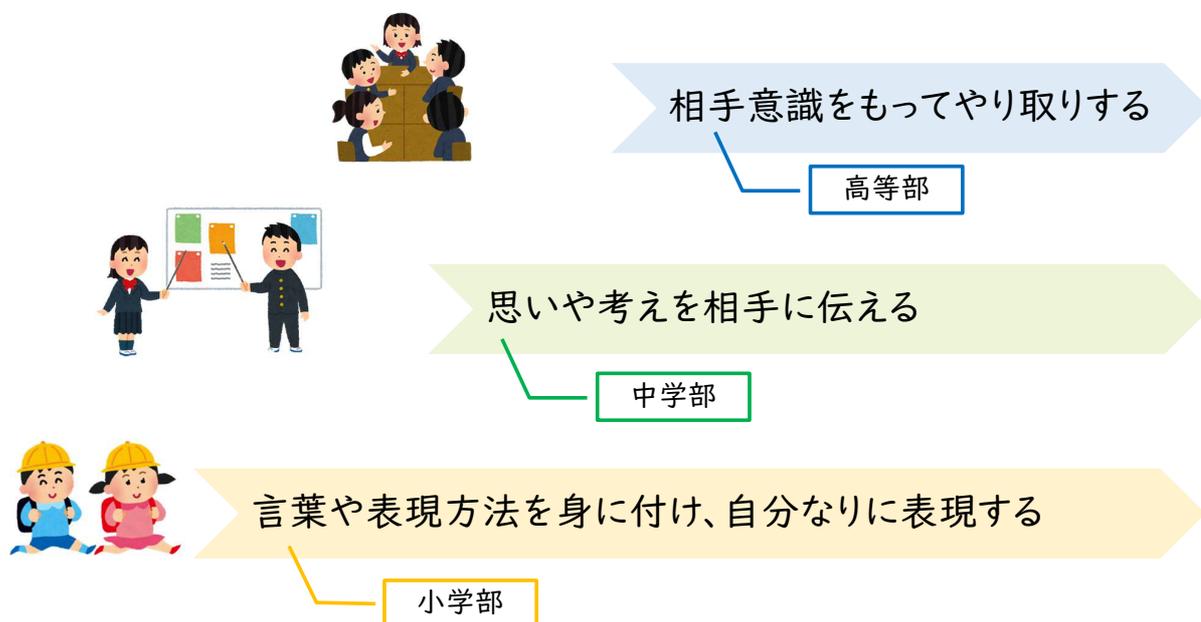
・自分の思いや考えを表す**言葉に気づき**、表現したり伝えようとしたりする力

言葉や表現方法を身に付け、自分なりに表現してみる

小学部

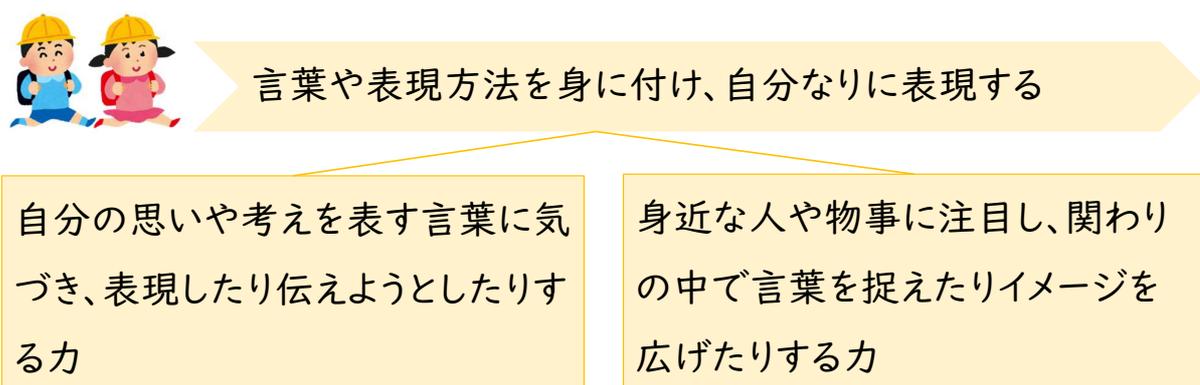
・身近な人や物事に注目し、関わりの中で**言葉を捉えたりイメージを広げたりする力**

育成したい国語力



【自立と社会参加】
社会で他者と共同・協働しながら、その子らしく精一杯生きる

小学部で育成したい国語力



【感性・情緒の側面を重視】*言葉によって感じたり想像したりする力や感情や想像を言葉にする力

・文学的な文章において、気持ちや感情を読み取る。

- ① 様々な描写をとらえ、内容を大づかみに把握（理解）する。
- ② 登場人物の行動や場面の様子などを想像する。 など

【自立と社会参加】
社会で他者と共同・協働しながら、その子らしく精一杯生きる

中学部で育成したい国語力



思いや考えを相手に伝える

自分の気持ちや考えを言葉や文字などそれぞれの表現方法で相手に伝える力

話し手が伝えたいことの内容を適切に捉え、捉えた内容を自分なりの言葉で話す力や行動に移す力

【創造的・論理的思考の側面を重視】*情報を多面的・多角的に精査し構造化する力

・説明的な文章において、的確に論理を読み取る

- ① 中心となる言葉や文、情報を選択しながら、内容を捉える。
- ② 文章の構成に沿って、内容を読み取る。

・自分の考えや意見などを正確に伝える文章を書く

- ① 自分の考えや意見を書く。
- ② 読み手が理解しやすい構成を意識して、文章を書く。

・自分の考えを明確にして伝える。

- ① 自分の考えや意見を整理し、順序立てて話す。 など

【自立と社会参加】
社会で他者と共同・協働しながら、その子らしく精一杯生きる

高等部で育成したい国語力



相手意識をもってやり取りする

豊かな語彙力と表現方法を身に付け、自分の気持ちや考え、想像したことを適切な言葉で表す力

話し手が伝えたいことの内容を適切に捉え、互いに納得・合意を図りながら物事を進める力

【他者とのコミュニケーションの側面を重視】*言葉を通じて伝え合う力

・話の要旨を把握して、その内容を理解する

- ① 事実や根拠などに注意しながら、話の内容を正確に聞き取る。

・自分の考えを明確にして、説得力を持って伝える

- ① 相手の話を受け、その内容を踏まえて自分の考えや意見を話す。

・相手や場面・目的に応じ、伝えるべき内容を分かりやすく話す

- ① 他者に配慮した（不快感を与えない、傷つけない）話し方ができる。
- ② 話し合うことによって、相手との人間関係を深めることができる。
- ③ 場面や目的に応じた言葉を選び、表現に注意して情報を伝えることができる。 など

【自立と社会参加】
社会で他者と共同・協働しながら、その子らしく精一杯生きる

研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 ・配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

教育課程(小学部)

【表1】年間授業時数

学年	教科等	各教科						特別の教科 道徳	特別活動	自立活動	計
		生活	国語	算数	音楽	図画工作	体育				
1年		68	238	136	68	68	207.8	34	34	34	887.8
2年		70	245	140	70	70	213.9	35	35	35	913.9
3・4年		125	255	175	60	60	200	35	35	70	1015
5・6年		205	195	175	50	50	200	35	35	70	1015

【表2】指導の形態による年間授業時数

学年	指導の形態	各教科等を含めた指導			教科別の指導						特別活動	計
		日常生活の指導	生活単元学習	遊びの指導	国語	算数	音楽	図画工作	体育			
1年		434.4	30.2	90.7	30.2	30.2	30.2	30.2	181.3	30.2	887.8	
2年		447.2	31.1	93.3	31.1	31.1	31.1	31.1	186.7	31.1	913.9	
3・4年		408.4	93.3	77.8	77.8	77.8	31.1	31.1	186.6	31.1	1015	
5・6年		408.4	124.4	46.7	77.8	77.8	31.1	31.1	186.6	31.1	1015	

【参考】知的障害の教育課程小学部・中学部における各教科等別/各教科等を含めた指導の授業時数の中央値

教科等	表Ⅲ-2より 各教科等を含めた指導				表Ⅲ-1より 教科別の指導									
	日常生活の指導	生活単元学習	遊びの指導	作業学習	生活	国語	算数	音楽	図画工作	体育	特別の教科道徳	外国語活動	特別活動	自立活動
小学部 3年	338.4 (210-431) (n=161, 0=11)	175 (128-210) (n=151, 0=23)	85.5 (70-124.9) (n=64, 0=103)	(n=0)	115 (70-175) (n=27, 0=134)	78 (63.4-111.8) (n=158, 0=12)	70 (52.5-105) (n=157, 0=12)	70 (35-70) (n=169, 0=6)	53 (35-70) (n=131, 0=39)	70.5 (70-105) (n=169, 0=4)	35 (35-35) (n=35, 0=123)	15 (4-15) (n=11, 0=154)	35 (35-35) (n=133, 0=37)	115.9 (70-175) (n=144, 0=28)

【出典】国立特別支援教育総合研究所(2021)特別支援教育における教育課程に関する総合的研究—新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けた現状と課題—36-38。
 *教科が実施されている場合の、授業時数の代表値を明らかにしたかったため、「0」の回答は除いて算出されている。
 *括弧内は第1四分位数-第3四分位数を示している。また、n=有効回答数、0=「0」と回答した数を示している。

教育課程(中学部)

【表1】年間授業時数

学年	各教科									特別の教科 道徳	総合的な学 習の時間	特別活動	自立活動	計
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	職業・ 家庭						
1~3年	175	70	150	70	31.5	63	133	123		35	63	35	70	1018.5

【表2】指導の形態による年間授業時数

学年	各教科等を合わせた指導			教科別の指導							総合的な 学習の 時間	特別活動	計
	日常生活の 指導	生活単元 学習	作業学習	国語	数学	音楽	美術	保健体育	職業・家庭				
1~3年	192.5	189	157.5	63	63	31.5	63	133	31.5	63	31.5	1018.5	

【参考】知的障害の教育課程小学部・中学部における各教科等別/各教科等を合わせた指導の授業時数の中央値

学年	表Ⅲ-2より 各教科等を合わせた指導					表Ⅲ-1より 教科別の指導								特別の 教科 道徳	総合的 な学習 の時間	特別 活動	自立 活動
	日常生 活の 指導	生 活 単 元 学 習	遊 び の 指 導	作 業 学 習	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	職業・ 家庭	外国語				
中学部 3年	210 (175-340.5) (n=151, 0=25)	140 (70.1-175) (n=179, 0=26)	140 (n=1, 0=169)	140 (94.5-175) (n=276, 0=31)	85 (60.8-105) (n=167, 0=9)	70 (35-80) (n=35, 0=133)	70 (52.8-105) (n=167, 0=9)	70 (35-70) (n=35, 0=134)	56 (35-70) (n=174, 0=7)	51 (35-70) (n=146, 0=29)	84 (70-115.4) (n=70, 0=6)	70 (35-70) (n=70, 0=102)	35 (35-70) (n=34, 0=138)	35 (28-35) (n=38, 0=126)	35 (35-59.5) (n=170, 0=9)	35 (35-37.3) (n=148, 0=28)	105 (56-175) (n=143, 0=33)

【出典】国立特別支援教育総合研究所(2021)特別支援教育における教育課程に関する総合的研究—新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けた現状と課題—,36-38.
*教科が実施されている場合、授業時数の代表値を明らかにしたかったため、「0」の回答は除いて算出されている。
*括弧内は第1四分位数-第3四分位数を示している。また、n=有効回答数を、0=「0」と回答した数を示している。

教育課程(高等部)

【表1】年間授業時数

類型・ 学年	各教科										学校設 定教科	特別の 教科 道徳	総合的 な探究 の時間	特別 活動 (HR)	自立 活動	計
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	職業 家庭								
I類型1年	175	70	150	70	31.5	70	133	154.5	31.5	0	35	31.5	35	63	1050	
I類型2・3年	175	70	150	70	31.5	35	133	154.5	31.5	63	35	31.5	35	35	1050	
II類型1~3年	140	70	120	70	31.5	48	133	136.5	31.5	63	35	31.5	35	105	1050	

【表2】指導の形態による年間授業時数

類型・ 学年	各教科等を合わせた指導					教科別の指導							学 校 設 定 教 科	総合的 な探究 の時間	特別 活動 (HR)	計
	日常生 活の 指導	生活単元 学習	作 業 学 習	課 題 学 習	国語	数学	音楽	美術	保健 体育	職業 家庭						
I類型1年	192.5	63	31.5	283.5	0	63	63	31.5	63	133	31.5	31.5	0	31.5	31.5	1050
I類型2・3年	192.5	63	31.5	283.5	0	63	63	31.5	0	133	31.5	31.5	63	31.5	31.5	1050
II類型1~3年	192.5	63	0	346.5	94.5	0	0	31.5	31.5	133	0	31.5	63	31.5	31.5	1050

【参考】知的障害の教育課程高等部普通科における各教科等別/各教科等を合わせた指導の授業時数の中央値

学年	表Ⅲ-4より 各教科等を合わせた指導					表Ⅲ-3より(専門教科・科目は省略) 教科別の指導										特別の 教科 道徳	総合的 な探究 の時間	特別 活動	自立 活動	学 校 設 定 教 科
	日常生 活の 指導	生 活 単 元 学 習	作 業 学 習	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	職業 家庭	外国語	情報							
高等部 2年 (抜粋)	175 (122.5-297.5) (n=117, 0=46)	105 (70-147.3) (n=126, 0=37)	231 (156-315) (n=137, 0=26)	70 (65-105) (n=153, 0=10)	56 (35-70) (n=81, 0=82)	70 (61.8-105) (n=152, 0=11)	50.5 (35-70) (n=80, 0=83)	65 (35-70) (n=147, 0=16)	66 (35-70) (n=135, 0=28)	105 (70-125.3) (n=159, 0=4)	100.5 (56.8-141) (n=104, 0=59)	70 (49-70) (n=117, 0=46)	35 (35-35) (n=65, 0=98)	35 (33-35) (n=45, 0=118)	35 (35-35) (n=58, 0=105)	35 (35-41) (n=155, 0=8)	35 (35-35.1) (n=158, 0=5)	105 (70-175) (n=124, 0=39)	66 (41-218.8) (n=10, 0=153)	

【出典】国立特別支援教育総合研究所(2021)特別支援教育における教育課程に関する総合的研究—新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けた現状と課題—,39-41.
*教科が実施されている場合、授業時数の代表値を明らかにしたかったため、「0」の回答は除いて算出されている。
*括弧内は第1四分位数-第3四分位数を示している。また、n=有効回答数を、0=「0」と回答した数を示している。

研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

児童生徒の諸検査結果より

【LCスケール】(特小2~3段階小学部児童)

○言語の発達は3歳前半である。

○ひらがな単語の音読より、すべて正確に読むことができた児童と、拗音が意識できていない児童とが混在している。

○音韻意識が十分発達している児童と、未発達な可能性がある児童とが混在している。

【低次の読み書き;文字を音に変換しての意味理解】(特中1段階中学部生徒 / 特高1段階高等部生徒)

○小学校第3学年程度の発達に近い獲得ができています。

【高次の読み;文章内容の理解】(特中1段階中学部生徒 / 特高1段階高等部生徒)

○時間を延長して追加の問題を実施しても、半数以上の生徒は効果がほとんどみられなかった。

○知的機能の発達に遅れが認められ、例えば言葉と言葉を組み立てて話すことが難しかったり、抽象的な言葉の理解が難しいことへの配慮が必要である。

○文章読解に係る困難さには個別性がある。

単純に時間を多く設定することが効果的な支援であるとは限らない。「高次の読み」については、個々の障害の特性を考慮し、他の効果的な支援について模索していく必要がある。

研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 ・配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

国語科で何を学ぶのか？

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

小学校

1. 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
2. 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
3. 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

特別支援学校(中学部)

1. 日常生活や社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
2. 日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
3. 言葉がもつよさに気付くとともに、言語感覚を養い、国語を大切にしてその能力の向上を図る態度を養う。

※1.2の下線部について、小学部は「日常生活」、高等部は「社会生活」と示されている。

※3の下線部について、小学部は「言葉で伝え合うよさを感じる」、高等部は「言葉がもつよさを認識する」と示されている。

【出典】
 ・文部科学省(2018)小学校学習指導要領(生成29年告示)解説国語編.11
 ・文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)(平成30年3月).80-259
 ・文部科学省(2020)特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(上)(高等部).43

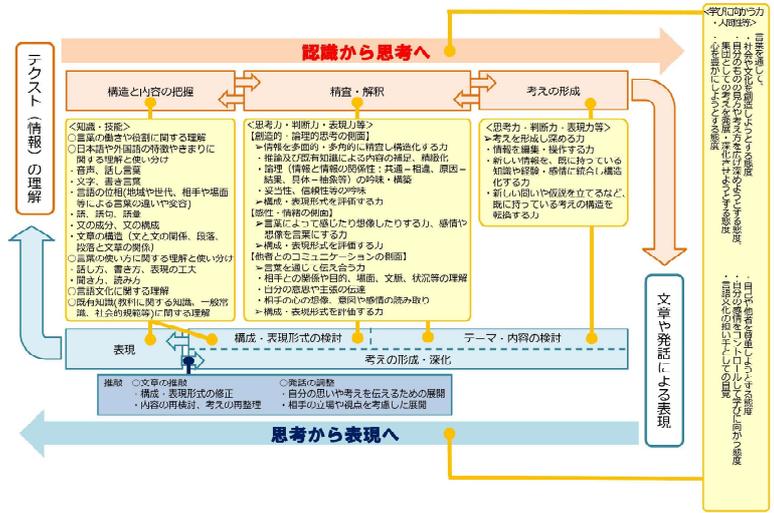
言語能力を構成する資質・能力が働く過程

言語能力を構成する資質・能力は、資料2のように、①テキスト(情報)を理解するための力が「認識から思考へ」という過程の中で、②文章や発話により表現するための力が「思考から表現へ」という過程の中で働いている。

知的障害の有無に関わらず、すべての児童生徒が言語活動を通して、国語の資質・能力の育成を目指していく。

言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ

資料2



【出典】

中教審教育課程部会(2016)言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ、6・20

研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 ・配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

知的障害教育における「教科」の動向と課題

【小学校等の教育課程との連続性を重視】

・今回の学習指導要領改訂では、特別支援学校（知的障害）の各教科等の目標・内容の示し方を小学校等と共通化することによって、教育が目指すところは小学校等同じであることをより明確にした。

【知的障害教育における教科の捉え方】

・「知的障害のある児童生徒のための各教科の目標・内容の整理を行うことを踏まえ、長期的には、幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校等との間で、教育課程が円滑に接続し、子供たち一人一人の学びの連続性を実現していくために、国として、学校種別にかかわらず、各教科の目標・内容を一本化する可能性についても検討する必要がある。」（中教審、2016）

・インクルーシブ教育の一層の推進を図る視点から、特別支援学校（知的障害）のみが独自の各教科の目標・内容を示していることの問い直しを試みる。



特別支援学校（知的障害）のみが、独自の各教科等の目標・内容を示してきた経緯を確認し、その肯定的評価・否定的評価を踏まえたうえで、研究開発の実証的資料の整理を行う。

知的障害教育における教育課程の課題整理

【インクルーシブ教育システムの構築にあたって】

・特別支援学校や特別支援学級に在籍する児童生徒が、通常の学級において学ぶ機会が増えることが想定される。

・通常校と特別支援学校との間に、各教科等の目標・内容の整合性がないとすれば、インクルーシブ教育システム構築にあたっての教育課程上の障壁になりうる。

→今回の改定で、小学校等の教育課程との連続性が重視され、目標・内容の整合性がとられつつある。

知的障害のある児童生徒に対して、小学校等における各教科等に準ずる教育課程とすればよい？

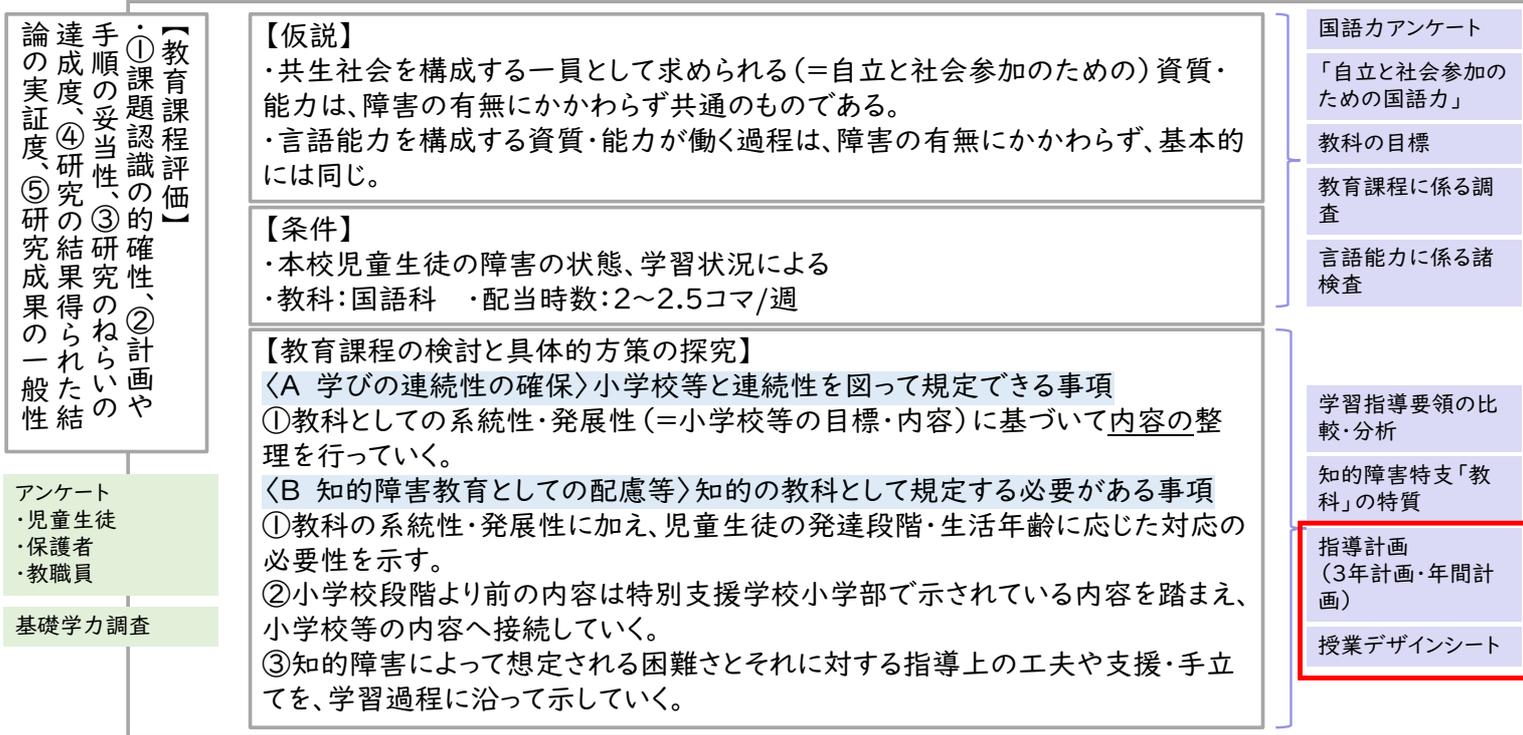
【小学校等と目標・内容を一本化することへの懸念】

・特別支援学校（知的障害）が通常教育とは別に目標・内容を示してきたのは、児童生徒の発達の状態や学習上の特性に応じた教育を行うためである。

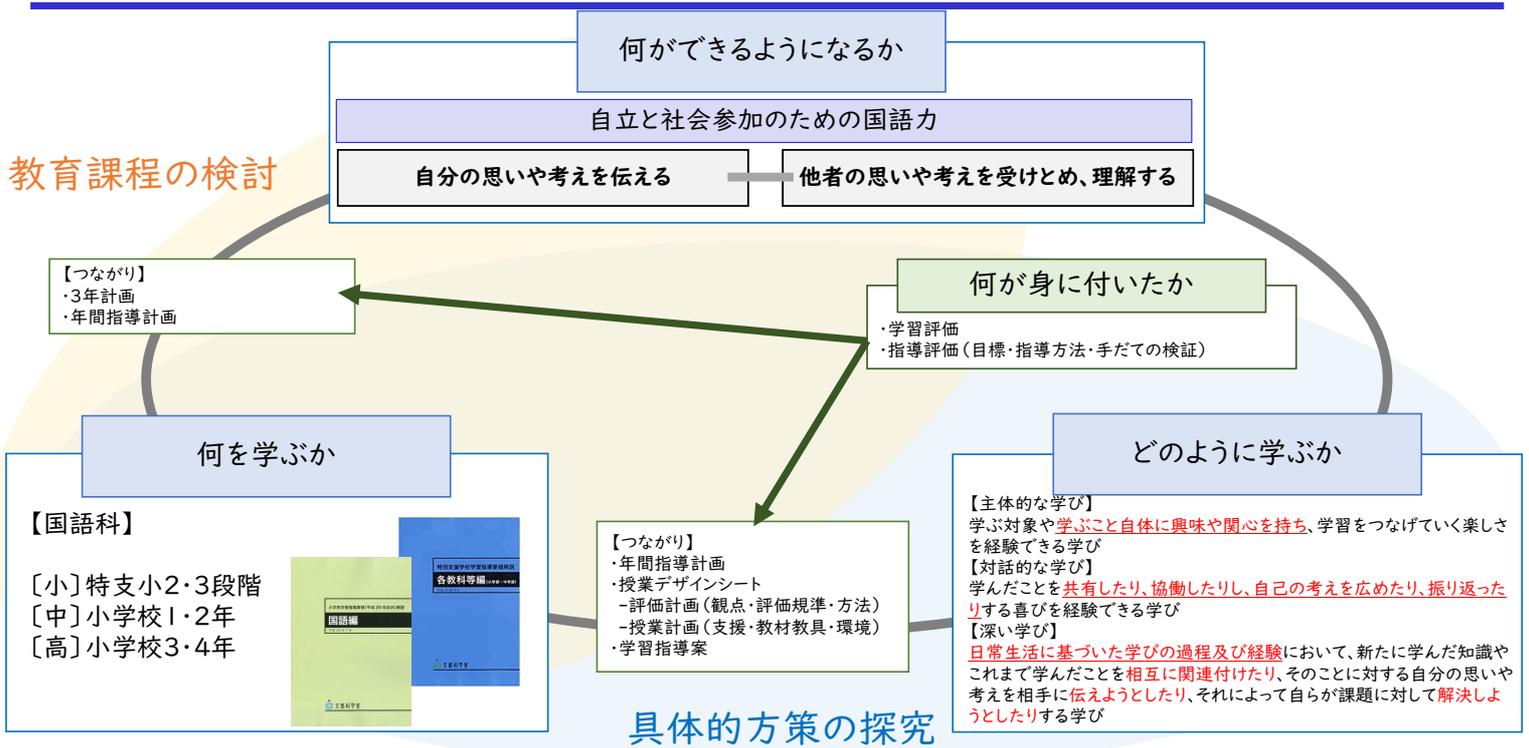
・単純に小学校等に準じた指導を行うとすれば、それは特別支援教育の基本的理念である、一人一人の教育的ニーズに応える教育とはならない。

①目標・内容の整合性、②知的障害のある児童生徒の学習上の特性等を踏まえた教育的対応の2点から、各教科の目標・内容を一本化する可能性を示していく必要がある。

研究の全体構想



教育課程の検討と具体的方策



研究の全体構想

【教育課程評価】
 ①課題認識の確性、②計画や手順の妥当性、③研究のねらいの達成度、④研究の結果得られた結論の実証度、⑤研究成果の一般性

アンケート
 ・児童生徒
 ・保護者
 ・教職員

基礎学力調査

【仮説】

・共生社会を構成する一員として求められる(=自立と社会参加のための)資質・能力は、障害の有無にかかわらず共通のものである。
 ・言語能力を構成する資質・能力が働く過程は、障害の有無にかかわらず、基本的には同じ。

【条件】

・本校児童生徒の障害の状態、学習状況による
 ・教科:国語科 ・配当時数:2~2.5コマ/週

【教育課程の検討と具体的方策の探究】

〈A 学びの連続性の確保〉小学校等と連続性を図って規定できる事項

①教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理を行っていく。

〈B 知的障害教育としての配慮等〉知的の教科として規定する必要がある事項

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

国語力アンケート

「自立と社会参加のための国語力」

教科の目標

教育課程に係る調査

言語能力に係る諸検査

学習指導要領の比較・分析

知的障害特支「教科」の特質

指導計画
 (3年計画・年間計画)

授業デザインシート

総括

【特別支援学校学習指導要領(小・中学部)】

第1章 総則

第2章 各教科

第1節 小学部

第2款 知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校

第1 各教科の目標及び内容

〔国語〕

1 目標

2 各段階の目標及び内容

3 指導計画の作成と内容の取扱い

第2節 中学部

第2款 知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校

第1 各教科の目標及び内容

〔国語〕

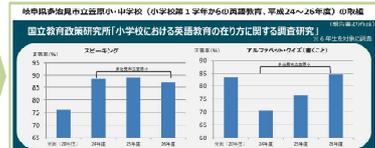
1 目標

2 各段階の目標及び内容

3 指導計画の作成と内容の取扱い

② 既存教科の発展・再編

- 小学校第3学年からの英語教育 (埼玉県深谷市)
- 小学校第1学年からの英語教育 (多治見市立笠原小・中学校)
- 高等学校の地理歴史科の再編による「歴史基礎」「地理基礎」の設置 (日本橋女学館高等学校) 等



年改訂に資する実

教科としての系統性・発展性(=小学校等の目標・内容)に基づいて内容の整理が可能

【出展】

文部科学省初等中等教育局教育課程課(2023)研究開発学校と学習指導要領。

A-① 国語科教育の構造と内容

「知識及び技能」の内容・構成

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	言葉の働き、話し言葉と書き言葉、漢字、語彙、文や文章、言葉遣い、表現の技法、音読、朗読
(2) 情報の扱い方に関する事項	情報と情報の関係、情報の整理
(3) 我が国の言語文化に関する事項	伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、書写、読書

「思考力、判断力、表現力等」の内容・構成

話すこと	聞くこと	話し合うこと	書くこと	読むこと
話題の設定	(話題の設定)	(話題の設定)	題材の設定	
情報の収集	(情報の収集)	(情報の収集)	情報の収集	
内容の検討	構造と内容の把握	(内容の検討)	内容の検討	構造と内容の把握 (説明的な文章・ 文学的な文章)
構成の検討		話し合いの進め方の検討	構成の検討	精査・解釈 (説明的な文章・ 文学的な文章)
考えの形成	精査・解釈		考えの形成	考えの形成
表現	考えの形成	考えの形成	記述	共有
共有	共有	共有	推敲	
			共有	

【参考】文部科学省(2017)学習指導要領(平成29年告示)解説,198-207

総括

【特別支援学校学習指導要領(小・中学部)】

第1章 総則

第2章 各教科

第1節 小学部

第2款 知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校

第1 各教科の目標及び内容

〔国語〕

1 目標

2 各段階の目標及び内容

3 指導計画の作成と内容の取扱い

第2節 中学部

第2款 知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校

第1 各教科の目標及び内容

〔国語〕

1 目標

2 各段階の目標及び内容

3 指導計画の作成と内容の取扱い

② 既存教科の発展・再編

- 小学校第3学年からの英語教育(埼玉県深谷市)
- 小学校第1学年からの英語教育(多治見市立笠原小・中学校)
- 高等学校の地理歴史科の再編による「歴史基礎」「地理基礎」の設置(日本橋女子館高等学校)等



年改訂に資する実

①教科の系統性・発展性に加え、児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性を示す。

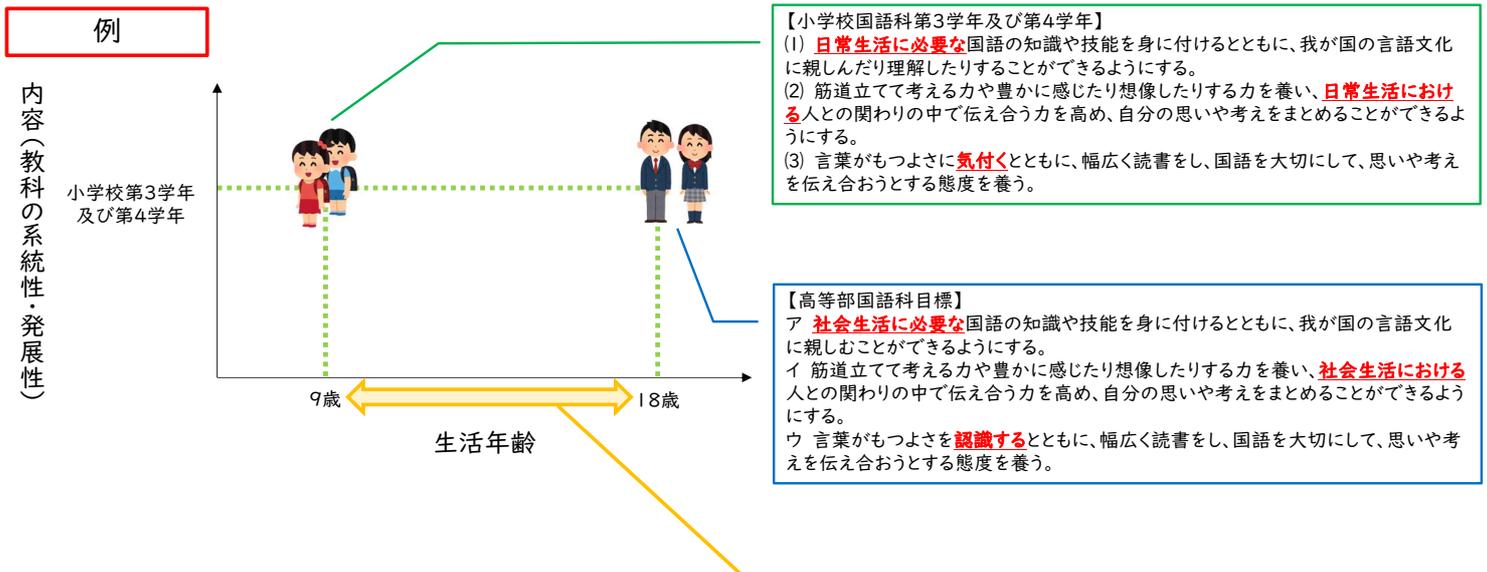
②小学校段階より前の内容は特別支援学校小学部で示されている内容を踏まえ、小学校等の内容へ接続していく。

③知的障害によって想定される困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立てを、学習過程に沿って示していく。

【出展】

文部科学省初等中等教育局教育課程課(2023)研究開発学校と学習指導要領。

B-① 児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応の必要性



- ①「自立と社会参加」の視点から、指導のまとめ方、指導の順序及び重点の置き方を工夫する。
- ②生活年齢を踏まえ、目標や言語活動、題材を設定する。

B-② 小学校段階より前の内容と小学校への接続について

【小学部の内容】

- ・小学部1段階は6～8か月程度以上の認知発達に対応して内容が示されている。
 - ・小学部3段階（著作本）と小学校第1学年及び第2学年（小学校第1学年の教科書）の比較を通して、国語科における系統性・発展性を整理し、円滑な接続を図ることを試みる。
- 本校においては「読むこと」を取り上げ、文章テキストによる読解ができるようになるまでの筋道と指導・評価方法の一端を明らかにしていく。

発達年齢の目安	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
小1段階	← 知識及び技能 →												
小2段階	← 知識及び技能 →						← 思考力、判断力、表現力等 →						
小3段階	← 知識及び技能 →							← 思考力、判断力、表現力等 →					
中1段階	← 知識及び技能 →								← 思考力、判断力、表現力等 →				
中2段階	← 知識及び技能 →									← 思考力、判断力、表現力等 →			
高1段階	← 知識及び技能 →										← 思考力、判断力、表現力等 →		
高2段階	← 知識及び技能 →											← 思考力、判断力、表現力等 →	

【参考・引用】

・米田宏樹(2022)知的障害教育と通常教育の教育方法の融合によるインクルーシブ教育カリキュラム実現の可能性.特別支援教育実践研究.2.16-25.

・巖早紀・相澤雅文(2023)知的障害教育における発達段階に応じた授業づくり-特別支援学校学習指導要領「国語科」の指導内容を視点として-.総合教育臨床センター研究紀要.2.55-67.

B-③ 困難さとそれに対する指導上の工夫や支援・手立て

【通常の学級】

② 改善・充実の方向性 [資料3]

○ 小・中学校の通常の学級においても、発達障害を含めた障害のある子供たちが在籍している可能性があることを前提に、個々の子供の障害の状態等の実態把握や、障害の状態等に応じた指導内容・指導方法の工夫を検討することが必要である。

○ このため、全ての教科等の授業において、一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援がで
きるよう、障害種別の指導の工夫のみならず、各教科等の学びの過程において想定される困難さとそれに対
する指導上の工夫の意図や手立ての具体例を示すことが必要である。

国語科の学習過程ごとに、困難さ(学びにくさ)は何か、それを踏まえどのように手だてを講じるのか、指導上
の工夫の意図や手立ての具体例を示していく。

→児童生徒が持っている「強み」を十分に発揮できる指導計画・単元構想・授業展開の工夫を図り、児童生
徒の学習評価から指導評価を行う。

【出典】中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会特別支援教育部会(2016)特別支援教育部会における審議の取りまとめ。

研究の取組

学校HP

